



郁子(土)

○晩学の学びはひとり西行忌

よもぎ餅川土手摘みし日の匂ひ

日脚伸びリユックふくらむ帰宅かな

酔花

○春風いちごにいびつな歯型あり

○春筍をくれし靴ひも泥のあと

野辺送り過疎の小川は花模様

えり

○ふらここを揺らば思ひも宙の中

耕や好みの餌あり鳥の嘴

弾み入る庭のあれこれ彼岸過

志津子

○連翹や黒猫ゆつくり潜りゆく

○畑打つ草とミミズと小半日

○春雨や草木も我も背を伸ばす

富子

桜咲き妣の針箱埃積む

気がつけば彼岸遠去け十年か

耕され天を仰ぐか黒土は

千代

○児を連れて市民農園耕せり

○春耕の畑に祠と開拓碑

○石塊に彼岸の供華の二三本



郁子(岡)

○春耕や牛追う父に想い馳せ

○いそいそとぼたもちつくる彼岸かな

野に山へ虎杖捜し踏み分けて

迪子

彼岸入り面影忘れじ声忘る

花見席ひらり舞い込むカップ酒

耕人は丸き背伸ばし時を止め

利恵

雨の後姿見えずに初音聞く

ふるさとの雪山の中白木蓮

ごみ出しの帰り道です初すみれ

文子

○いつもの僧彼岸の経の短さよ

○大叔母の隠居部屋跡白木蓮

山間の急勾配の田耕せる

農子

○耕やしやふわりと浮かぶ白い雲

彼岸入り蓬摘み摘み坂登る

水温む橋下に拡ぐ水輪や

初江

○燕来る無人駅舎となる駅に

初彼岸世代交代進む家

貸農園指示書頼りに打つ春田

富江

耕しへ声掛たくて農日和

春の海津波対策景色消ゆ

早春の平均台へはや米寿

丞子

○野蒜もて山の翁のお持て成し

○障子穴ふさぐ子の絵や冴返る

ふるさとの気紛れ雪の彼岸かな

瑞枝

○耕人の無言の祈り天と地へ

蒼天を白木蓮に明け渡し

春潮にもてあそぶる園児かな



味元 昭次 作品

耕耘機止め虎杖を手折りたる

手を上げて笠智衆来る彼岸かな

春の霜彼岸の知己の微笑みて

★次回市民句会

【開催日時】

令和六年四月二十四日(水)

午後一時十五分～午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます

